

太宰治「如是我聞」注釈（二）

尾崎めぐみ・片木晶子・近藤史織・関朱夏・丸山麻結・李娜娜・山口俊雄

〔要旨〕 太宰治晩年のエッセイ「如是我聞」（『新潮』一九四八・三、五―七）は、《日本の既成文学に対するもつとも本質的な批判を行った歴史的な記念碑として、最重要に評価したい》（奥野健男「解説」、太宰治『もの思う葦』新潮社、二〇〇二、三―七頁）という声はあるものの、外国文学者や志賀直哉への激越な批判が書き連ねられているため、冷静に読むことが難しいテキストである。太宰治の作品としても重要であり、また文学史的な価値を持つ文章という認識のもと、このテキストを冷静に読み、適切に評価するための一助として、ここに注釈を試みる。

〔キーワード〕 弱者・先輩後輩・家庭・民主主義・封建思想・奴隷根性・志賀直哉・落ち

〈凡例〉

・太宰治の文章からの引用はすべて青空文庫に拠った。「如是我聞」の底本も青空文庫である。多くの読者が容易にアクセスできる本文を選ぶことが望ましいという判断から、これを底本とした。

・太宰の文章の執筆（推定）時期については、山内祥史「解題」（『太宰治全集』筑摩書房、一九八九―九二）、同『太宰治の年譜』（大修館書

店、二〇一二）に拠った。

・他作家の文章からの引用も含め、仮名遣いは原文通り、漢字は通行の字体とした。ルビについては、「如是我聞」を除き、適宜取捨した。

・○で始まる部分は、◇で始まる「如是我聞」への注釈内で引用された文章についての注釈である。

・青空文庫、JapanKnowledgeほか、ウェブページからの引用の閲覧日は二〇二三年一月一三日である。

・本文は掲載号ごとに一から四までに分かれているが、一から三までは、既に前号に掲載されており、今回は四を扱う。

・発表当時、紙不足・印刷工場稼働状況等の理由により雑誌の実際の発売日が奥付の発行日と大きく乖離している場合もあり、太宰についての発言に太宰がどのタイミングで接して反応したかが分るよう、雑誌の広告が『朝日新聞』『読売新聞』に掲載された日も載せた（『如是我聞』年表）を付しておく。

四

或る雑誌の座談会の速記録を読んでいたら、志賀直哉というのが、妙に私の悪口を言っていたので、さすがにむっとなり、この雑誌の先月号の小論に、附記みたいにして、こちら大いに口汚なく言い返してやったが、あれだけではまだ自分も言い足りないような気がしていた。いったい、あれは、何だつてあんなにえげつたもの言い方をしているのか。普通の小説というものが、将棋だとするならば、あいつの書くものなどは、詰将棋である。王手、王手で、そうして詰むにきまつている将棋である。旦那芸の典型である。勝つか負けるかのおのきなどは、微塵もない。そうして、そののつべら棒がご自慢らしいのだからおそれ入る。

◇《志賀直哉というのが》……(三三)の終わりのほうにも《志賀直哉という人が》とあったが、それと同様、よそよそしい書き方に嫌みが含まれているように思われる。

◇《あれだけではまだ自分も言い足りないような気がしていた。》……《先月号の小論》(三三)における志賀批判は、《或る雑誌の座談会》すなわち志賀直哉・広津和郎・川端康成「文芸鼎談」(「社会」一九四八・四)を踏まえたものだったが、(三三)執筆後に発表された志賀直哉・佐々木基一・中村眞一郎「座談会 作家の態度(一)——志賀直哉氏をかこんで」(『文藝』一九四八・六)にも太宰を批判する志賀の発言が掲載されており、これが(四)で志賀攻撃を続行する誘因になったと考えられる。詳細については、このあとの実際の言及箇所で見られる。

◇《普通の小説というものが、将棋だとするならば、あいつの書くものなどは、詰将棋である。》……詰将棋とは、《将棋の実践とは別に、任意の数の駒を用いて王将を詰めることを目的として作った将棋》(『日本国語大辞典』JapanKnowledgeによる。以下同)のこと。「如是我聞」の草稿にも、詰将棋の意と思われる「ツメシ」(「如是我聞」手帖」として翻刻、『太宰治全集13』筑摩書房、一九九九、二六〇頁)とあり、志賀批判のキーワードとして草稿段階から温めていたものと思われる。「如是我聞」後段の志賀直哉「灰色の月」評価の箇所でも触れたい。

小谷瑛輔「日本の近代文学は将棋から始まった？」は、織田作之助「可能性の文学」(『改造』一九四六・一二)、坂口安吾「大阪の反逆」(『改造』一九四七・四)、そしてこの「如是我聞」と、新戯作派(無頼派)と括られる三人の作家がいずれも将棋を引き合いに出して志賀文学批判を行っていることに着目し、《志賀の小説は、相手のいる将棋の対局でさえなく、詰将棋に過ぎない》と指摘することで、太宰が志賀の《自らの内なる将棋性、遊戯性を否認する》《答が決まっているかのような窮屈な文学観を批判》しているとする(『将棋と文学スタディーズ』将棋と文学研究会、二〇一九、一四三頁)。

こうした《普通の小説》を引き合いに出しながら志賀の作風を否定してゆくレトリックは、「如是我聞」前段(三三)の《小説が、もし、絵だとするならば、その人の発表しているものは、書である》とも通い合い、さらに後段の《落ち》の問題とも繋がってゆくだろう。

◇《旦那芸》……《金持や商家の主人が、慰みに習いおぼえる芸事》(『日本国語大辞典』)

どだい、この作家などは、思索が粗雑だし、教養はなし、ただ乱暴なだけで、そうして己れひとり得意でたまらず、文壇の片隅にいて、一部の物好きのひとから愛されるくらいが関の山であるのに、いつの間にかやら、ひさしを借りて、凶々しくも母屋に乗り込み、何やら巨匠のような構えをつくって来たのだから失笑せざるを得ない。今月は、この男のことについて、手加減もせずに、暴露してみようつもりである。

孤高とか、節操とか、潔癖とか、そういう讃辞を得ている作家には注意しなければならない。それは、殆んど狐狸性こりせいを所有しているものたちである。潔癖などということは、ただ我儘わがままで、頑固がんこで、おまけに、抜け目無くて、まことにいい気なものである。卑怯ひきょうでも何でもいから勝ちたいのである。人間を家来けらいにしたいという、ファッショ的精神せいしんとでもいうべきか。

こういう作家は、いわゆる軍人精神せいしんみたいなものに満されているようである。手加減しないとさつき言ったが、さすがに、この作家の「シンガポール陥落」の全文章をここに掲げるにしのびない。阿呆あほうの文章である。東条とうじょうでさえ、こんな無神経むしんけいなことは書くまい。甚だ、奇怪なることを書いてある。もうこの辺から、この作家は、駄目になっているらしい。

言うことはいくらでもある。

◇《孤高とか、節操とか、潔癖とか、そういう讃辞を得ている作家》……（一）にも《馬鹿者は、それを「立派」と言い、「潔癖」と言い、ひどい者は、「貴族的」なぞと言つてあがめているようである。》という

似たような記述があつたが、ここではさらに《孤高》《節操》の語も追加されている。ずばり《孤高》《節操》の語が用いられたものではないが、志賀の作家イメージに触れた一九三〇年代の文章を拾つておく。

志賀氏の「万曆赤絵」は、内容は何にもないといつてもいい、様なものであるが、相変らずの氏らしい「高雅」や「気品」は他の誰にもかけないものだと思ふ。氏にあつては生活と芸術とが全くの不離な状態にある様だ。従つて氏の作品の「高雅」や「気品」は、その生活の「高雅」や「気品」から来るので、その「高雅」や「気品」は「万曆赤絵」を求めに満洲まで出かけられる様なわれ／＼とは一寸桁の違ふ生活の余裕から来てゐるともいへるであらう。「略」氏の旧作に「へうたん」といふのがあるがあの少年の様に貧乏な中でもひまさへあれば、へうたを磨いてゐる様なあくまで「志賀式」純真性を保つだらうか。だがあれば若しかすると、氏の様な貴族的な生活をしてゐる人の考へ出した空想的少年に過ぎなくて、実際にはそんな家庭に、そんな少年は居ないのではないかと思ふ。（福田晴子「文芸時評」『火の鳥』一九三三・一〇、八四、八五頁）

志賀直哉の小説は随分気むづかしい厳格な作家の人為を思はせる「略」。（小山東一「文芸時評」『文學生活』一九三六・七、一一〇頁）太宰は「徒党について」（『文藝時代』一九四八・四）で《孤高》に触れて、次のように述べている。

孤高。それは、昔から下手へたなお世辞の言葉として使い古され、そのお世辞を奉られてゐる人にお目にかかつてみると、ただいやな人間で、誰でもその人につき合うのはご免、そのような質ちかの人が多いようである。そうして、その所謂「孤高」の人は、やたらと口をゆがめて「群」をののしる。なぜ、どうしてののしるのかわけがわか

らぬ。「略」「孤高」と自らを号しているものには注意をしなければならぬ。第一、それは、キザである。ほとんど例外なく、「見破られたけたタルチュフ」である。どだい、この世の中に、「孤高」ということは、無いのである。

◇《人間を家来にした》……(三)で述べられた民主主義の本質《民主主義の本質は、それは人によっていろいろに言えるだろうが、私は、「人間は人間に服従しない」あるいは、「人間は人間を征服出来ない」、つまり、家来にすることが出来ない」それが民主主義の発祥の思想だと考えている。》に反する考え方である。

◇《ファッショ的精神》《軍人精神》……連想が接続し、志賀がアジア太平洋戦争初期に発表した「シンガポール陥落」(『文藝』一九四二・三)が呼び出される。

同文は、一九四二年二月八日、日本軍がイギリスの海峡植民地のシンガポールに侵攻、一五日に陥落させ占領を開始したという一連の戦果を受けて執筆、陥落二日後の一九四二年二月一七日、日本放送協会よりラジオ放送され、『文藝』三月号巻頭に載せられた。

本文第一段落で今回の事態を《人智を超えた歴史の此急転回実に古今未曾有の事である。》と位置付けた後、第二段落以下で次のように述べている。

米国では敗因を日本の実力を過小評価した為めだと云ふ。然し米国のいふ日本の実力とは何を云ふのだらう。彼は未だに己れの経済力を頼つて、歴大な軍備予算を世界に誇示し、日本をも威嚇するつもりであるが、精神力に於て自国が如何に貧しいかを殆ど問題にしてゐないのは日本人からすればまことに不思議な気がする。

日本軍が精神的に、又技術的に^{えいぜん}断然勝れてゐる事は、開戦以来、

日本人自身すら驚いてゐるが、日々応接にいとまなき戦果のうちに天祐によるものも数ある事を知ると、吾々は謙讓な気持にならな^いではゐられない。天吾れと共に在り、といふ信念は吾々を一層謙讓にする。

一億一心は期せずして実現した。今の日本には親英米などいふ思想はあり得ない。吾々は互に謙讓な気持を持ち続け、国内よく和して、光輝ある戦果を少しでも穢すやうな事があつてはならない。天に見はなされた不遜なる米英がよき見せしめである。

若い人々に希望の生れた事も実に喜ばしい。吾々の気持は明るく、非常に落ちついて来た。

謹んで英靈に額づく。(後段に志賀直哉『早春』「小山書店、一九四二」を人から借りたとあるため、『早春』一四四、一四五頁より引用。以下同じ。)

「如是我聞」の叙述において、この段階では作品名にのみ言及し、その内容については《ここに掲げるにしのびない。阿呆の文章である》と具体的に触れず、価値判断を示すだけにとどめている。しかし、このあと二度にわたって「シンガポール陥落」の話題を持ち出し、文章の一部を引用しながら批判を繰り返すことになる。こうしたフエイントめいた書き方は嫌みの度合いを一層高めることになるだろう。

◇《もうこの辺から、この作家は、駄目になっているらしい。》……「如是我聞」中で言及されている志賀作品の発表時期は必ずしも一九四二年前後に限定されているわけではない。《この辺》とは時期のことではなく「シンガポール陥落」の内容のことを指し、こうした文章を発表してしまう志賀のメンタリティを批判したものと考えられる。

この者は人間の弱さを軽蔑している。自分に金のあるのを誇っている。「小僧の神様」という短篇があるようだが、その貧しき者への残酷さに自身気がついてるだろうかどうか。ひとにものを食わせるというのは、電車でひとに席を譲る以上に、苦痛なものである。何が神様だ。その神経は、まるで新興成金そっくりではないか。

◇『小僧の神様』……『白樺』（一九二〇・一）に発表。あらずじは次の通り。

番頭の鮎談義を聞いて食べたくなった小僧仙吉は、四銭を持って鮎屋に行くが、鮎は六銭であり食べることができなかった。その場に居合わせた若い貴族院議員Aは、その後秤屋で仙吉を見かけて外に連れ出す。Aは勘定を支払い、仙吉に存分に鮎を食べさせるが、後に変にいやな、淋しい気持ちが残ってしまう。一方、小僧は、あの人は神様なのだと思仰に近い気持ちを持ち、つらいことがあるとあの人を思い出すようになる。

◇『ひとにものを食わせる』……その『苦痛』について、太宰は「たずねびと」（『東北文学』一九四六・一二）、「美男子と煙草」（『日本小説』一九四八・三）でも触れている。「たずねびと」では、施しを受ける側の苦しさが、「美男子と煙草」では、施しを与える側のやりきれなさが描かれている。

逢って、私は言いたいです。一種のくしみを含めて言いたいです。

「お嬢さん。あの時は、たずかりました。あの時の乞食は、私です。」

と。（「たずねびと」）

私は焼鳥屋のおかみに向い、

「おい、この子たちに一本ずつ。」

と言い、実に、へんな情なさを感じました。

これでも、善行という事になるのだろうか、たまらねえ。私は唐突にヴァレリーの或る言葉を思い出し、さらに、たまらなくなりました。

もし、私のその時の行いが俗物どもから、多少でも優しい仕事と見られたとしたら、私はヴァレリーにどんなに軽蔑されても致し方なかつたんです。

ヴァレリーの言葉、——善をなす場合には、いつも詫びながらしなければいけない。善ほど他人を傷けるものはないのだから。（「美男子と煙草」）

「小僧の神様」の貴族議員Aも仙吉に施しをした後、『人知れず悪い事をした後の気持ちに似通った』変に淋しい、いやな気持ちを感じるが、『兎に角恥づべき事を行つたといふのではない。少くとも不快な感じが残らなくてもよささうなものだ』（『志賀直哉全集 第三卷』岩波書店、一九九九、二七五頁）と思ひ直そうとし、結局『俺のやうな気の小さい人間は全く軽々しくそんな事をするものぢあ、ないよ』（二七八頁）というところに落ち着く。施しを受ける側に着意する太宰と違い、施す側の自意識に終始している。

またある座談会で（おまえはまた、どうして僕をそんなに気にするのかね。みつともない。）太宰君の「斜陽」なんていうのも読んだけど、閉口したな。なんて言っているようだが、「閉口したな」などという卑屈な言葉遣いには、こっちのほうであきれた。

どうもあれには閉口、まいったよ、そういう言い方は、ヒステリック

クで無学な、そうして意味なく昂ぶっている道楽者の言う口調である。ある座談会の速記を読んだら、その頭の悪い作家が、私のことを、もう少し真面目にやったらよからうという気がするね、と言っていたが、嘖然とした。おまえこそ、もう少しどうにかならぬものか。

さらにその座談会に於て、貴族の娘が山出しの女中のような言葉を使う、とあつたけれども、おまえの「うさぎ」には、「お父さまは、うさぎなどお殺せなさいますの？」とかいう言葉があつた筈で、まことに奇異なる思いをしたことがある。「お殺せ」いい言葉だねえ。恥しくないか。

おまえはいつたい、貴族だと思つているのか。ブルジョアでさえないじゃないか。おまえの弟に対して、おまえがどんな態度をとつたか、よかれあしかれ、てんで書けないじゃないか。家内中が、流性感冒にかかつたことなど一大事の如く書いて、それが作家の本道だと信じて疑わないおまえの馬面がみつともない。

◇《またある座談会で（おまえはまた、どうして僕をそんなに気にするのかね。みつともない。）……前述の通り《ある座談会》は志賀直哉・佐々木基一・中村眞一郎「座談会 作家の態度（一）」——志賀直哉氏をかこんで」（『文藝』一九四八・六）を指す。

志賀 「略」それから太宰君の「斜陽」なんていふのも読んだけど、閉口したな。

佐々木 はあ、さうですか。

志賀 閉口したつていふのは、貴族の娘が山だしの女中のやうな言葉を使ふんだ。田舎から来た女中が自分の方に御の字をつけるや

うな言葉を使ふが、所々にそれがある。それから貴婦人が庭で小便するのなんでも厭だつた。作者がその事に興味を持つ事が厭なのかも知れない。

佐々木 あれは最後になつてガタ落ちになりましたね。

志賀 あの作者のポーズが気になるな。ちよつととぼけたやうな。あの人より若い人には、それほど気にならないかも知れないけど、こつちは年上だからね、もう少し真面目にやつたらよからうといふ気がするね。あのポーズは何か弱さといふか、弱気から来る照れ隠しのポーズだからね。

佐々木 若い連中には、ああいふポーズが喜ばれるらしいです。

志賀 横光君なんかでも、僕はあのポーズで読めないんだ。あのポーズそのものがいけないのか、ポーズで胡麻化しているのいけないのか、どつちだか知らないけど……。とにかくああいふことはやつぱりやらないほうがいいと思ふんだけどね。芥川君だつて、あれほどぢやないけど、やつぱりさういふことが禍ひしてるだらうね。ポーズといふものも、僕の「矢島柳堂」、あれはあれで材料から来るポーズで、ああいふのは仕方がない。

佐々木 「斜陽」なんていふのは、決して貴族の婦人を書いたからああいふふうになつたといふのぢやなしに、何か自分の抱いたイメーヂを貴族の婦人に托して書いたといふものですね。

志賀 それがうまくゆけばいいけどね、山出しの女中の敬語みたいなものが随所に出てくるから、たまらないよ。

佐々木 今の二十代の青年なんか、戦争中から太宰の影響下に育つた人といふのが、ずあぶん多いやうですが……。

志賀 どうも評判のいい人の悪口をいふ事になつて困るんだけど、

僕にはどうもいい点が見付からないね。（五三頁）

この座談会掲載誌は、新聞広告の掲載日（『朝日新聞』六月一日朝刊、『読売新聞』六月四日朝刊）から、六月一〜四日頃に発売されたと推定され、「如是我聞」担当編集者・野平健一の回想（『如是我聞』と太宰治）『新潮』一九四八・六↓野平『矢来町半世紀―太宰さん三鳥さんのこと、その他』新潮社、一九九二、五六、五七頁）に（四）の執筆が六月四日の深夜から徹夜で行なわれたとあり、発売されたばかりの『文藝』当該号の内容に接して一気呵成に語られた（口述筆記された）のがこの（四）であることが分る。（三）までに比べて（四）の語り口がより激越なものとなり、志賀批判が執拗なものとなったのは、そうした執筆経緯と切り離せない（末尾の〈「如是我聞」年表〉を参照）。

○《「矢鳥柳堂」》……志賀直哉「矢鳥柳堂」は、「白藤」（『改造』一九二五・六）、「赤い帯」（『女性』一九二五・七）、「鶴」（『新潮』一九二六・二）、「百舌」（『不二』一九二六・二）の四篇から成る。あらずは次の通り。

坐骨神経痛を患う画家の矢鳥柳堂は、妹の看病のもと暮らしていた。七月、保養のため草津温泉に赴いた彼は、いつも赤い帯を締めている十四、五歳の少女を何度か目にし、心を惹かれる。少女の働く遊び茶屋に行ってみたが、彼女は柳堂の想像したような少女ではなかった。秋になり、柳堂は昔関係のあった小娘を思い出しながら鶴を飼うも、鶴は全く馴れることなく死んでしまう。春頃、彼はなりゆきで百舌の子を飼うことになる。よく懐く百舌を可愛がるが、親鳥の元へ帰ろうとするのでやむなく手離す。

○《ポーズといふものも、僕の「矢鳥柳堂」、あれはあれで材料から来るポーズで、ああいふのは仕方がない。》……一人の画家を虚構し

視点人物にしたので、そのことに由来するポーズは創作上必要で非難されるべきことではないということか。

◇《「閉口したな」などとという卑屈な言葉遣いには、こっちのほうでよかった。》……「閉口する」という言葉は太宰も例えば次のように用いており、この語の使用自体に批判的なのではないだろう。

家庭内のどんなささやかな紛争にでも、必ず末弟は、ぬっと顔を出し、たのまれもせぬのに思案深げに審判を下して、これには、母をはじめ一家中、閉口している。（『愛と美について』竹村書房、一九三九）

浦島は亀の驚くべき饒舌に閉口し切つてみたが、しかし、その最後の一言に、ふと心をひかれた。（『浦島さん』『お伽草紙』筑摩書房、一九四五）

《「あきれた」というのは、先輩作家（志賀）が、軽んじている後輩作家（太宰）に対して、とても歯が立たないという《卑屈》な敗北宣言をし、他人の作品を説明抜きで乱暴に片付けてしまっているからだろう。後段の《私の労作に対して「閉口」したなどと言っているからだろう。おさまっている》というのも、《若いものたち》を前に呆れ気味に降参のポーズをしてみせるだけで太宰の《「労作」》を評価した気になっている志賀の姿勢を批判したものであろう。こうした批判は、このあと触れる「斜陽」の言葉遣いに対する志賀からの批判への前哨戦と言えるかもしれない。

◇《おまえの「うさぎ」》……「兎」（『素直』第一輯、一九四六・九、巻頭作）。漢字表記の「兎」が正しいタイトル。

◇《「お父さまは、うさぎなどお殺せなさいますの？」とかい言葉》……「兎」の本文には、《飼つて了へばお父様屹度お殺せになれない。》（前

掲『素直』五頁）とある。正確な引用ではないが、あるいは（四）末尾の《太宰などお殺せ、なさいますの？》との照応のための意図的な改変だったのかもしれない。

◇『お殺せ』いい言葉だねえ。恥しくないか。……命を奪うという意味の言葉を尊敬表現で記すことへの違和感が込められているのだろう。

◇『おまえの弟に対して、おまえがどんな態度をとったか、よかれあしかれ、てんで書けないじゃないか。……『おまえの弟』というのは、志賀直哉と十六歳年の離れた異母弟・志賀直三のこと。直三は、女性問題や父の遺産問題、映画事業をめぐる金銭問題など様々なトラブルを引き起こし直哉の頭を悩ませる存在であった。直三を取り上げた数少ない作品の一つ「菫野」（『改造』一九三四・四）では、直三絡みのトラブルへの不快感が示されるばかりで、彼の関わった映画の内容については全く言及がない。鶴谷憲三が《愛着を持ちつつも生家から拒まれていた太宰治が、志賀家の蕩児である直三をわが身と重ね合わせたのはごく自然であったはずである》（『ふたくみの兄弟』『太宰治論―充溢と欠如』一九九五、六八、六九頁）と述べるように、同じく弟という立場にある太宰には、弟の事業活動に関心を示さず、迷惑がるばかりで寄り添おうとしない志賀直哉の態度が冷酷に感じられ、このような批判に至ったか。

◇《家内中が、流行性感冒にかかったことなど一大事の如く書いて、それが作家の本道だと信じて疑わない》……「流行感冒」（『白樺』一九一九・四）のこと。あらずじは次の通り。

流行感冒（スペイン風邪）が蔓延していた一九一八年の秋、小説家の私は、妻と娘、石、きみという二人の女中と暮らしていた。一家の感染を恐れた私は、毎年恒例にしていた芝居興行の鑑賞へ出かけるのを女中に禁じる。しかし、石は約束をやぶったうえ、芝居には行っていない

と私に嘘をつく。そんな彼女が恐くなった私は石を辞めさせることに決めるが、妻の哀願に思いとどまる。やがて一家も次々に感染するに至るが、その際一人感染を免れた石が驚くほどよく働くのを見て、私は彼女を見直すようになる。

批判の対象となった《一大事の如く》感染の出来事が描かれている点については、志賀自身も、「創作余談」（『改造』一九二八・六）中で、《子供の病気に対する恐怖心は今から思へば少し非常識であった。此小説の左枝子といふ娘の前後二児を病気でとられた私は此子供の為には病的に病気を恐れてゐたのだ。》（『志賀直哉全集 第六巻』岩波書店、一九九九、二〇八頁）と自己批判的に振り返っている。その点では、太宰の指摘の通り、やや大袈裟な書き振りであったことは否めない。こうした作者自身が自己批判している作品をわざわざ取り上げている点に、太宰の皮肉が込められていると見ることもできるかもしれない。

強いということ、自信のあるということ、それは何も作家たるもの重要な条件ではないのだ。

かつて私は、その作家の高等学校時代だけに、桜の幹のそばで、いやに構えている写真を見たことがあるが、何という嫌な学生だろうと思った。芸術家の弱さが、少しもそこになかった。ただ無神経に、構えているのである。薄化粧したスポーツマン。弱いものいじめ。エゴイスト。腕力は強そうである。年とつてからの写真を見たら、何のことはない植木屋のおやじだ。腹掛井（どんが）がよく似合うだろう。

◇《その作家の高等学校時代だけに、桜の幹のそばで、いやに構えてい

る写真』……檀一雄『小説太宰治』（六興出版社、一九四九）に『如是我聞』の中で、激しく指弾していた、例の志賀さんの写真（改造社の志賀直哉全集の中に入っている、木の幹に凭れた例の学生の頃の写真である）（岩波書店、二〇〇〇、五九頁）とあるように、『志賀直哉全集』（改造社、一九三二）の口絵写真の一枚『明治四十年 東京にて』というキャプション付きのものを指しているよう。（国会図書館デジタルコレクションで閲覧可能。）

◇《植木屋のおやじ》……「如是我聞」の草稿に《怒つたら／何を／するか／わからぬ／兇悪》《直哉―植木屋》《里見―板前》《武者―云はぬ》（日本近代文学館所蔵太宰治自筆資料集、J―D A C、影印・翻刻『太宰治全集13』二四五、二四七頁）との記述あり。

私の「犯人」という小説について、「あれは読んだ。あれはひどいな。あれは初めから落ちが判ってるんだ。こちらが知ってることを作家が知らないと思つて、一生懸命書いてる。」と言っているが、あれは、落ちもくそもない、初めから判っているのに、それを自分の慧眼けいがんだけがそれを見破っているように言っているのは、いかにももうろくに近い。あれは探偵小説ではないのだ。むしろ、おまえの「雨蛙あまがえる」のほうが幼い「落ち」じゃないのか。

いったい何だつてそんなに、自分でえらがつているのか。自分ももう駄目ではないかという反省を感じたことがないのか。強がることはやめなさい。人相が悪いじゃないか。

◇《私の「犯人」という小説について》……（三）の終盤で、志賀の「犯人」批判（『社会』一九四八・四）に反批判していたが、今回の（四）で

の言及は、前掲「座談会 作家の態度（二）」で志賀が再び同様の批判を述べたことへの反批判となっている。

編集部 「中央公論」新年号の「犯人」は？……

佐々木 あれは愚作だつたな。

志賀 あれは読んだ。あれはひどいな。あれは初めから落ちが判つてるんだ。こちらが知つてゐることを作者が知らないと思つて、一生懸命書いてゐる。

佐々木 匿してやつてるわけですね。

志賀 これは芥川君にもあの人の「奉教人の死」だつたか、さういふ小説に就いて言つたことがあるんだけど、僕の「子を盗む話」でも、それから「邦子」なんていふ小説の場合でも、事件の結果を一番先きへ書いて了ふ。仕舞ひにそこまで話がゆくといふ事を読者に知らして置く。そしてその道程を丹念に書いて行く。僕の好みかも知れないが、一生懸命に書いてゐる事を、どうなるんだらうといふ事件の興味だけで読まれるのは厭やだと思ふ。夢を書く場合でも、初めから夢だと言つて了ふ方がいいね。

編集部 ふつうに小説が面白いといふときは、その逆ですね。

志賀 通俗小説はそれでいいかも知れないけど、やつぱり、読者を甘く見る事だらうね。それから小説は一遍だけ読むものか、二度読むものか。自分が作る時は読み返して丁寧ていねいに書いてるんだからね、やつぱり二度目は興味が非常に違ふといふやうなものを書くことは、詰らないね。

佐々木 しかし、よつほど強い人でないと、さういふふうに来ない所があるんですね。太宰なんかでも、どこか芯の弱いやうな所があつて……。

志賀 太宰君のポーズは、弱い所から来てるね。

佐々木 ええ。

志賀 まともにゆくよか、ちよつと横へ身を避けてゐないと、不安だといふやうな……。

佐々木 ええ。それと非常に見栄坊のところが……。

志賀 だから、当人とすればそのことにも言ひ訳があるかも知れないけどね、しかし読まされるほうは、愉快でないからね。

佐々木 わざとやつてるのではないんでせうきつと。いはゞあ、いふ逆説的なスタイルやポーズを取ることによつてしか、レアリティを出すことが出来ない、つまり、正攻法で押して行けるだけの自我の实体が希薄になつてゐるといふ時代の宿命を負つた作家のやうな気がします。然しあれで、太宰はだんだんまともな行き方を取るやうになりつゝ、あるやうにも思はれます。

志賀 さうかね。

中村 つまり、まともからもやれる、わきからもやれる、しかし自分にはわきを選んだ、さういふことではないんでせう。

志賀 それは実生活でもさういふ人があるね。だけでも、どうもそいつはあんまり珍重すべきことではないな。

佐々木 ええ。(前掲号、五三、五四頁)

杉森久英「志賀直哉と太宰治」に《私は編集者として、この座談会を企画し、進行係を務めた》(『戦後文壇覚え書』河出書房新社、一九九八、五三頁)とある。

○《『奉教人の死』……『三田文学』(一九一八・九)に発表。あらずじは次の通り。

長崎を舞台にした切支丹物。ろ、おれんぞは、信仰心の強さと玉のよ

うな美しさから人々の憐れみを誘う存在であつた。しかし、傘張の娘との噂を立てられた挙句、その娘が妊娠したことでろ、おれんぞは破門を余儀なくされる。一年あまり後、長崎は大火に見舞われた。娘の子は炎に呑まれたがろ、おれんぞが現われて救い出す。子を抱いた娘は泣き崩れ、真の父親は別人であると懺悔する。まるちり(殉教)として称えられたろ、おれんぞの焼け破れた衣からは清らかな二つの乳房が姿をのぞかせていた。ろ、おれんぞは、娘と同じ女性であつた。

○《これは芥川君にもあの人の「奉教人の死」だつたか、さういふ小説に就いて言つたことがあるんだけど》……志賀直哉「杵掛にて―芥川君のこと」(『中央公論』一九二七・九)に次のようにある。

芥川君の「奉教人の死」の主人公が死んで見たら実は女だつたといふ事を何故最初から読者に知らせて置かなかつたか、と云ふ事だつた。今は忘れたが、あれは三度読者に思ひがけない想ひをさせるやうな筋だつたと思ふ。筋としては面白く、筋としてはいいと思ふが、作中の他の人物同様、読者まで一緒に知らさずに置いて、仕舞ひで背負投げを食はずやり方は、読者の鑑賞がその方へ引張られる為め、其所まで持つて行く筋道の骨折りが無駄になり、損だと思ふと私は云つた。読者を作者と同じ場所で見物させて置く方が私は好きだ。芥川君のやうな一行々々苦心して行く人の物なら、読者はその道筋のうまさや味はつて行く方がよく、さうしなければ勿体ない話だといふやうな意味を云つた。あれでは読者の頭には筋だけが残り、折角の筋道のうまさは忘れられる、それは惜しい事だと云ふ意味だつた。

一体芥川君のものには仕舞で読者に背負投げを食はずやうなものがあつた。これは読後の感じからいつても好きでなく、作品の

上からいへば損だと思ふといった。氣質の異ひかも知れないが、私は夏目さんの物でも作者の腹にははつきりある事を何時までも読者に隠し、釣つて行く所は、どうも好きになれなかつた。私は無遠慮に只、自分の好みを云つてゐたかも知れないが、芥川君はそれらを素直にうけ入れてくれた。そして、

「芸術といふものが本統に分つてゐないんです」といつた。（『志賀直哉全集 第六巻』岩波書店、一九九九、一二頁）

○《「子を盗む話」》……正しくは「児を盗む話」（『白樺』一九一四・四）。あらずしは次の通り。

父にひどく責め立てられ、東京の家を後にした私は、瀬戸内海沿いの市へやって来て、小さな貸家に住む。積み重なる疲労で執筆の仕事を中止してから、腕が良いという按摩のもとを訪ねた時、五歳ほどの可愛い按摩の娘を目にした。ある夜、芝居小屋で六歳ほどの美しい別の児を見かけた私は、その児を盗む空想をするようになるが、会えなくなつたために按摩の娘を盗んでしまう。後日、巡査と探偵とともにやって来た娘の母に罵られ、私は警察に連行された。

○《「邦子」》……『文藝春秋』（一九二七・一〇）に発表。《邦子が自殺した事は何といつても私の責任だ。》（『志賀直哉全集 第六巻』岩波書店、一九九九、一八頁）という一文から始まり、私と妻の邦子との出会いから、彼女が死に至るまでの経緯が語られた短篇小説。私が以前女中と不義を働いたことを邦子に告白したのをきっかけに、彼女は私の女性関係に不信感を抱くようになる。その後、私と女優との間にゴシップが出たことで口論になり、邦子は自殺する。

○《僕の「子を盗む話」》でも、それから「邦子」なんていふ小説の場合でも、事件の結果を一番先きへ書いて了ふ。……志賀はこう言うが、

「児を盗む話」の場合、《事件の結果を一番先きへ書いて了ふ》というのが当てはまるのは『白樺』に載せた初出本文についてのみであり、冒頭にあつた《私は五つになる其女の児を盗んだ。》という一文は初収単行本『大津順吉』（新潮社、一九一七）収録時に削除された。志賀自身、この点について迷いもあり、創作にまつわる^{コンプレックス}意識下に沈み、それが芥川や太宰の作品への批判・攻撃として現われたのかもしれない。

◇《「雨蛙」》……『中央公論』（一九二四・一）に発表。あらずしは次の通り。

田舎町の酒屋の若い主である賛次郎は、自身の文学趣味が嵩じるに従い、妻のせきにも教養を身につけさせたいと思うようになる。ある日、小説家と劇作家が主催する講演会にせきが一人で行くことになるが、そこで彼女は小説家に犯されてしまう。翌日せきを迎えに行き、そのことを知った賛次郎は彼女を堪らなく可愛いと感じる。彼は、電柱の中段に見つけた夫婦づがつている雨蛙を親しみ深く眺めるがせきは関心を示さなかつた。その夕、賛次郎は持っていた小説集と戯曲集を裏山で焼き捨てる。

◇《むしろ、おまえの「雨蛙」のほうが幼い「落ち」じゃないのか。》……妻に文学的教養を身につけさせようとしたことが裏目に出たと末尾で文学書を焼き捨てる主人公の短絡的発作的な行動によって締めくくり（落ち）を付けている点を《幼い》と批判したものか。

「コラム」〈落ち〉をめぐる

「如是我聞」（三）・（四）から、小説の〈落ち〉をめぐる志賀と太宰それぞれ認識の違いが浮かび上がる。発言を時系列順に追って両者の主

張を整理してみたい。

まず、そもそも〈落ち〉は落語に関する言葉なので、落語の〈落ち〉とは何かを確認しておこう。

落語の〈落ち〉の構造を詳細に分析した野村雅昭『落語の言語学』（講談社、二〇一三）を踏まえれば、要点は次の三点にまとめられよう。

・〈落ち〉は、意外性や非合理性をふくむ言動で笑いを引き起こす、落語には欠かせない要素である。

・〈落ち〉は何らかの結末を示すものであり、聞き手はそれ（緊張と緩和がある展開）を期待している。

・落語では、ラストの〈落ち〉がとりわけ重要であり、それに至るまでの過程は〈落ち〉をいかに面白くするかの仕込みであることが多い。

これらの特徴を念頭に置いた上で、志賀と太宰の発言を確認してみよう。

① 志賀 《二、三日前に太宰君の「犯人」とかいうのを読んだけれども、実につまらないと思ったね。始めからわかっているんだから、しまいを読まなくて落ちてはわかっているし……。》（志賀直哉・広津和郎・川端康成「文芸鼎談」『社會』一九四八・四、二三頁）

② 太宰 《作品の最後の一行に於て読者に背負い投げを食わせるのは、あまりいい味のものでもなからう。所謂「落ち」を、ひた隠しに隠して、にゅつと出る、それを、並々ならぬ才能と見做す先輩はあわれむべき哉、芸術は試合でないのである。「略」「落ち」を避けて、しかし、その暗示と興奮で書いて来たのはおまえじゃないか。》

〔如是我聞〕（三）『新潮』一九四八・六

③ 志賀 《あれは読んだ。あれはひどいな。あれは初めから落ちが判

つてるんだ。こちらが知つてゐることを作者が知らないと思つて、一生懸命書いてゐる。》（志賀直哉・佐々木基一・中村真一郎「座談会 作家の態度（二）」『文藝』一九四八・六、五三頁）

④ 太宰 《私の「犯人」という小説について、「あれは読んだ。あれはひどいな。あれは初めから落ちが判つてるんだ。こちらが知つてゐることを作家が知らないと思つて、一生懸命書いてゐる。」と言つているが、あれは、落ちもくそもない、初めから判つているのに、それを自分の慧眼だけがそれを見破つてゐるように言つてゐるのは、いかにももうろくに近い。あれは探偵小説ではないのだ。むしろ、おまえの「雨蛙」のほうが幼い「落ち」じゃないのか。》〔如是我聞〕（四）『新潮』一九四八・七）

⑤ 志賀 《続いて、「中央公論」に出た、「犯人」といふ短いものを読んだが、読んでゐるうちに話のオチが分つて了つたので、中村真一郎、佐々木基一両君との『文藝』の座談会で、「斜陽」の言葉と、このオチの分つた話とをした。寧ろオチは最初に書いて、其所までの道程に力を入れた方がいいと話した。二度読んで、二度目に興味を薄らぐやうなものは書かない方がいいとも云つたのである。》（志賀直哉「太宰治の死」『文藝』一九四八・一〇、二八、三九頁）

姉を殺したと勘違いして主人公が自殺するも、死んだと思つていた姉が実は生きており、主人公の死は無駄死にだったというのが「犯人」のあらすじだが、結末部分で姉の生存を明かすという叙述の手順、緊張から緩和へとという転換には、先ほど確認したような〈落ち〉を伴う落語の特徴に通じるものがあるろう。

そんな〈落ち〉とも見えるものを備えたこの「犯人」について、志賀は①③と二度にわたつて〈落ち〉は最後まで読まずとも分かり、〈落ち〉

になつていないと批判し、駄作と切り捨てている。

志賀が〈落ち〉という観点からこの作品を捉えたのには、「犯人」という探偵小説風のタイトルもあずかつていよう。〈真相はどうなっているか〉という関心を読者に喚起するという点で、タイトルが誤誘導的であることは否めまい。だが、太宰自身は《あれは探偵小説ではないのだ》と言っており、太宰が重きをおいた点は〈落ち〉よりも、そこに至るまでの過程やタイトルのひねりなどにあつたはずである。

「犯人」は、探偵小説風のタイトルで、姉を「殺した」〈犯人〉＝鶴がどうなるか（逃げ切るのか捕まるのか）という疑問で読者の興味を繋ぎつつ、鶴が自殺し果てた時、今度は、鶴を殺した〈犯人〉こそ誰なのか？——冷たくあしらつた姉か、はたまた部屋不足から若い人を絶望に追いやるような時代の方か——、と改めて考え直させる展開となつている。

しかし、志賀はそういった工夫を一切読み取らず、タイトルの誤誘導性にまんまと引つかつたまま浅い読みしかせずに作品を簡単に否定した。

「如是我聞」（三）の最後のほうに《「落ち」を避けて、しかし、その暗示と興奮で書いて来たのはおまえじゃないか》とあつたが、《事件の結果を一番先きへ書いて了ふ》という志賀のやり方は、倒叙式の探偵小説同様、結果を前ばらししておくことはあるにもせよ、結局、その結果に至るまでのプロセスで読者を引き付け、引つ張つてゆくのみだから、《その暗示と興奮で書いて来た》という太宰の指摘は間違つていないだろう。志賀自身が《読者はその道筋のうまさや味はつて行く方がよく》と先に引いた「沓掛にて」で言っているのと別のことではあるまい。

《事件の結果を一番先きへ書いて了ふ》と発言する志賀だが、実際には、先述の通り改稿時に冒頭での断りを削除したという「兎を盗む話」のよ

うな例もある。発言の菌切れの良さに反して、志賀はこの書き方について自信だけでなく迷いも抱えていたのではないだろうか。それが創作にまつわるコンプレックスこだわりとして意識下に沈み、芥川や太宰の作品への批判・攻撃として現われたのかもしれない。だとすれば、「犯人」問題は、志賀の単なる浅い読みとは片付けられず、志賀の創作論の急所に触れたものだったのかもしれない。

（四）冒頭の志賀作品の《詰将棋》ぶり批判とも併せ見ると、「如是我聞」は、ただ思い付くままに悪口を連ねたものではなさそうだ。

さらにまた、この作家に就いて悪口を言うけれども、このひとの最近の佳作だかなんだかと言われている文章の一行を読んで実に不可解であつた。

すなわち、「東京駅の屋根のなくなった歩廊に立っていると、風はなかつたが、冷え冷えとし、着て来た一重外套がいちぢょうで丁度よかった。」馬鹿らしい。冷え冷えとし、だからふるえているのかと思うと、着て来た一重外套で丁度よかった、これはどういうことだろう。まるで滅茶苦茶である。いったいこの作品には、この少年工に対するシンパシーが少しも現われていない。つっぱなして、愛情を感ぜしめようという古くからの俗な手法を用いているらしいが、それは失敗である。しかも、最後の一行、昭和二十年十月十六日の事である、に到つては噴飯のほかはない。もう、ごまかしが、きかなくなつた。

◇《このひとの最近の佳作だかなんだかと言われている文章》……タイトルを敢えて出さないであげつらうのは嫌みの一環だろうが、志賀直哉

「灰色の月」(『世界』一九四六・一)のことで、「如是我聞」後段に《『灰色の月』の掲載誌》と出て来る。あらずじは次の通り。

東京駅から山手線外回りの電車に乗った私は、隣で不気味に揺れる少年工から少し離れて着席していた。車内が混んでいく中、少年工を笑う人々があつたが、飢えによるものだと気付くと黙り込む。上野へ行こうとして乗り間違えていたことを知らされた少年工が身体を起こした拍子に寄りかかって来たところを、私はとっさに肩で突き返してしまう。電車が一周してしまつたことを知つた少年工の《『どうでも、かまはねえや』(前掲『世界』一五五頁)という独り言を忘れられぬまま、私は渋谷駅で下車した。

◇《最後の一行、昭和二十年十月十六日の事である、に到つては噴飯のほかはない。》……「如是我聞」の草稿には《プラットホームから〔□〕月を眺めたといふと□の新派「さ」くさい身振り、最後の年月日をいれて、作品をものものしくしようとしてゐる、ハツタリとはお前の事か、ツメシ》(翻刻「如是我聞」手帖『太宰治全集13』筑摩書房、一九九九、二六〇頁、「」内は抹消された表現、□は判読不可能な文字)とこの一文の含意が記されている。《作品をものものしくしようとしてゐる》あたりが太宰の「灰色の月」批判のポイントであると言えよう。《ツメシ》は(四)冒頭で志賀の作風について言つた《詰将棋》のことで、「灰色の月」は《詰将棋》の実例ということになるのだらう。

私はいまもって滑稽でたまらぬのは、あの「シンガポール陥落」の筆者が、(遠慮はよそうね。おまえは一億一心は期せずして実現した。今の日本には親英米などという思想はあり得ない。吾々の気持は明るく、非常に落ちついて来た。などと言つていたね。)戦後

には、まことに突如として、内村鑑三先生などという名前が飛び出し、ある雑誌のインターヴューに、自分が今日まで軍国主義にもならず、節操を保ち得たのは、ひとえに、恩師内村鑑三の教訓によるなどと言っているようで、インターヴューは、当てにならないものだけれど、話半分としても、そのおつちよこちよいは笑うに堪える。

◇《遠慮はよそうね》……(四)のはじめのほうでは、《手加減しないとさつき言つたが、さすがに、この作家の「シンガポール陥落」の全文章をここに掲げるにしのびない。》と、引用は控え、評価を示すだけにどめていたが、ここにきて引用を始める。さらにこのあともう一度「シンガポール陥落」に触れて、文中の《謙讓》の語の使用について否定的に触れる。後段で志賀の作品集『早春』(小山書店、一九四二)を借りて来たことが語られるが、「シンガポール陥落」はそこに収録されている。

◇《一億一心は》……先に見た通り志賀直哉「シンガポール陥落」第四段落に《一億一心は期せずして実現した。今の日本には親英米などいふ思想はあり得ない。吾々は互に謙讓な気持を持ち続け、国内よく和して、光輝ある戦果を少しでも穢すやうな事があつてはならない。天に見はなされた不遜なる米英がよき見せしめである。》とあり、続く第五段落に《若い人々に希望の生れた事も実に喜ばしい。吾々の気持は明るく、非常に落ちついて来た。》とあつた。

◇《戦後には、まことに突如として、内村鑑三先生などという名前が飛び出し》……内村鑑三との師弟関係について志賀は「濁った頭」(『白樺』一九一一・四)や「大津順吉」(『中央公論』一九二二・九)等の小説作品で触れ、近いところでは、「内村鑑三先生の憶ひ出」(『婦人公論』一九四一・三、前掲『早春』)、「新町随筆」(『展望』一九四六・三)といっ

たエッセイや天野貞祐との対談「対話―内村鑑三その他」（『文藝』一九四八・二）などで継続的に言及しているが、『まことに突如として』とあるのは、「シンガポール陥落」のような文章を書いた者が、日露戦争開戦時に反戦を唱えた内村鑑三の名前を出して『自分が今日まで軍国主義にもならず、節操を保ち得た』などと戦後になって言い出す豹変ぶりを指してのことだろう。

◇《ある雑誌のインタヴュー》……前掲「対話―内村鑑三その他」で志賀は次のように発言している。

しかし、内村先生にはちよいと随いていけないと思ひますね、僕等矢つ張りどうしても随いては行けない。然し先生についた事は、僕など、教へることは身につけなかつたが、矢つ張り非常によかつたと思つてゐます。必らずしも基督教的なものではなくとも、自分が斯うと信じた時にはどうしてもそれに随かなくてはならぬといふ氣になる。その氣持だけは残つてゐる。それでよいのだと思ひますね。

（前掲二八頁）

ただ、ここでは《自分が今日まで軍国主義にもならず、節操を保ち得たのは、ひとえに、恩師内村鑑三の教訓による》とまでは言っていない。

「新町随筆」にある次のような一節や、太宰が借りて来たと言ふ『早春』に収録された「内村鑑三先生の憶ひ出」中にある次のような一節などが、太宰の記憶の中で混じり合つたものか。

その頃「日露戦争の少し後」の私は学生時代に通つてゐた内村鑑三先生の影響で、戦争は極端に嫌ひであつたが「略」（「新町随筆」前掲六七頁）

私は此夏の講習会から七年余り先生に接して来た。不肖の弟子で、先生にとつて最大事である教の事は余り身につけず、自分は自分な

りに小説作家の道へ進んで来たが、正しきものを懂れ、不正虚偽を憎む氣持を先生によつてひき出された事は実にありがたい事に感じてゐる。（内村鑑三先生の憶ひ出」前掲『早春』二三四頁）

いったい、この作家は特別に尊敬せられていようだが、何故、そのように尊敬せられていのか、私には全然、理解出来ない。どんな仕事をして来たのだろう。ただ、大きい活字の本をこさえているようだけにだけしか思われぬ。「万曆赤絵」とかいふものも読んだけれど、阿呆らしいものであつた。いい気なものだと思つた。自分がおならひとつしたことを書いても、それが大きい活字で組まれて、読者はそれを読み、襟を正すというナンセンスと少しも違わない。作家もどうかしているけれども、読者もどうかしている。

◇《『万曆赤絵』》……『中央公論』（一九三三・九）に発表。あらずじは次の通り。

私は万曆赤絵を見に、奈良から大阪での展覧会に訪れる。しかし、高額で入手を諦めた帰り道、店で見かけた犬を買つてしまふ。子どもたちが喜んだのは最初だけで、私も世話が面倒になり、鑑札を外した犬はやがて戻らなくなつてしまつた。後日、満洲で不出来の万曆赤絵ならば安く購入できると聞いた私は、里見淳と満洲旅行に行くことにする。万曆赤絵は一度しか見かけず購入に至らなかつたが、鉄道部長から犬を譲り受けることになつた。

◇《作家もどうかしているけれども、読者もどうかしている。》……「万曆赤絵」は、発表同時代、『志賀直哉もすつかり「骨董」になつてしまつたものだ』（鳥賊之丞「大波小波」『都新聞』一九三三・九・二）、《我々

は寧ろ志賀直哉の身辺雑記として、その深い生活の喜びの描写に驚嘆と微笑とをもつて迎へたい》(曾我八郎「蛙の目」『時事新報』一九三三・八・二三)などと評された。烏賊之丞のように、批判的な評も見られる一方で、曾我の評には、志賀の作品であること自体に価値が見出され、無批判的でありがたがる姿勢が見て取れる。読者のこうしたあり方を太宰はここで批判していると考えられる。

志賀作品を神格化する読者(および神格化に疑問を持つ読者)が既に一九二〇年代に存在していたことが、次の引用から窺われる。

志賀直哉氏の「廿代一面」(新小説)は、どういふ典拠があるのか知らないが、「暗夜行路」同様、妙な標題をつけた物だと思ふ。志賀氏の物ならば、何でもかでも感心しきつてゐる人達には、かうした妙な標題までもが気に入るかも知れない。(生田長江「新年の創作」(三)『報知新聞』一九二三・一九)

太宰は、戦中に発表した『津軽』(小山書店、一九四四)でも次のように述べている。

日本の或る五十年配の作家の仕事に就いて問はれて、私は、そんなによくはない、とつい、うつかり答へてしまつたのである。最近、その作家の過去の仕事が、どういふわけか、畏敬に近いくらゐの感情で東京の読書人にも迎へられてゐる様子で、神様、といふ妙な呼び方をする者なども出て来て、その作家を好きだと告白する事は、その読書人の趣味の高尚を証明するたづきになるといふへんな風潮さへ瞥見せられて、それこそ、蠱屑の引きだふしと言ふもので、その作家は大いに迷惑して苦笑してゐるのかも知れないが、しかし、私がかねてその作家の奇妙な勢威を望見して、れいの津軽人の愚昧なる心から、「かれは賤しきものなるぞ、ただ時の武運つよくして

云々。」と、ひとりで興奮して、素直にその風潮に従ふ事は出来なかつた。さうして、このごろに到つて、その作家の作品の大半をまた読み直してみても、うまいなあ、とは思つたが、格別、趣味の高尚は感じなかつた。かへつて、エゲツナイところに、この作家の強みがあるのではあるまいかと思つたくらゐであつた。

名指してはいないが明らかに志賀直哉とその読者のことを言っており、『津軽』執筆時点で既に太宰は志賀を神格化する読者の態度を疑問視していたことが分る。

◇《ただ、大きい活字の本をこさえているようにだけしか思われない。》
《大きい活字で組まれて》……『万曆赤絵』の初収単行本『万曆赤絵』(中央公論社、一九三六)は菊判で、一二ポイント活字、一行三五文字、一頁二行という組み方。活字も大きく、余白(マージン)も大きい。他の多くの単行本については、『暗夜行路』(新潮社、一九二二、四六判)、『雨蛙』(改造社、一九二五、四六判)、『灰色の月 志賀直哉自選短篇集下』(細川書店、一九四七、B6判)をはじめ、五号活字(一〇・五ポイント)のものが多い。『万曆赤絵』と同じ一二ポイント活字であるのは、『早春』(前掲、A5判)のみである。

所詮は、ひさしを借りて母屋にあぐらをかいた狐である。何も無い。ここに、あの作家の選集でもあると、いちいち指摘出来るのだろうが、へんなもので、いま、女房と二人で本箱の隅から隅まで探しても一冊もなかつた。縁がないのだからと私は言った。夜更けていたけれども、それから知人の家に行き、何でもいから志賀直哉のものを借してくれと言ひ、「早春」と『暗夜行路』と、それから「灰色の月」の掲載誌とを借りることが出来た。

◇《女房と二人で本箱の隅から隅まで探しても一冊もなかった》……野平健一「如是我聞」と太宰治」（前掲）に次のような記述がある。

太宰さんは、しきりに、本箱をがたがたいわせ、あの本この本、ひっくりかえして、何かを探してみたが、ないらしく、

「おい、志賀チヨクサイの本はなかつたかね。何かあるだろう。」

奥さんも一緒になって、かなり長い間、かきまわしておられたがとうとう見つからず、

「縁がないんだねえ。まあいい。」（五七頁）

◇《早春》……収録作品は次の通り。

「淋しき生涯」「早春の旅」「病中夢」「無題」「ジイドと水戸黄門」「池の縁」「シンガポール陥落」「クマ」「鬼」「馬と木賊」「虫と鳥」「奈良・その他（四篇）」「赤帽子・青帽子」「金太の遺作品」「機織」「内村鑑三先生の憶ひ出」「泉さん」「中座の「忠臣蔵」を観る」

◇《暗夜行路》……「暗夜行路」の想定される刊本は、以下の通りである。

『暗夜行路 前篇』新潮社、一九二二、四六判、五号活字

『暗夜行路 前篇』岩波書店（岩波文庫）一九三八、菊半截文庫判、

八ポイント活字

『暗夜行路 後篇』岩波書店（岩波文庫）一九三八、同

『暗夜行路 豪華版』座右寶刊行会、一九四三、A5判、五号活字

『志賀直哉選集 第一巻 暗夜行路 前篇』小山書店一九四七、B6判、

九ポイント活字

『志賀直哉選集 第二巻 暗夜行路 後篇』小山書店、一九四七、同

「暗夜行路」

大袈裟な題をつけたものだ。彼は、よくひとの作品を、ハッターリの何だのと言っているようだが、自分のハッターリを知るがよい。その作品が、殆んどハッターリである。詰将棋とはそれを言うのである。いったい、この作品の何処に暗夜があるのか。ただ、自己肯定のすさまじさだけである。

何処がうまいのだろう。ただ自惚うぬぼれているだけではないか。風邪をひいたり、中耳炎を起したり、それが暗夜か。実に不可解であった。まるでこれは、れいの綴方教室、少年文学では無からうか。それがいつのまにやら、ひさしを借りて、母屋に、無学のくせにてれもせず、でんとおさまってけろりとしている。

◇《この作品の何処に暗夜があるのか》……自身の出生の秘密（母と祖父との不義の子）を知ったり、妻が不義を犯したりといった不幸な出来事に見舞われる主人公・謙作だが、基調は自己肯定であり、ひたすら暗夜を歩き続けるような《大袈裟な題》とギャップがあるということだろう。《作品をものものしくしようとしてゐる》という「如是我聞」の草稿にあった「灰色の月」評と通じるところがある。このあたりが太宰の批判のポイントといえるだろう。

◇《れいの綴方教室、少年文学》……《普通の小説》とは言い難い志賀作品を別ジャンルに貶めている。後段、末尾近くでは、さらに《子供の読物》と呼ぶことになる。

しかし私は、こんな志賀直哉などのことを書き、かなりの鬱陶し

さを感じている。何故だろうか。彼は所謂よい家庭人であり、程よい財産もあるようだし、傍に良妻あり、子供は丈夫で父を尊敬しているにちがいないし、自身は風景よろしきところに住み、戦災に遭ったという話も聞かぬから、手織りのいい紬ちしよなども着ているだろう、おまけに自身が肺病とか何とか不吉な病氣も持っていないだろうし、訪問客はみな上品、先生、先生と言つて、彼の一言隻句にも感服し、なごやかな空気が一杯で、近頃、太宰という思い上ったやつが、何やら先生に向つて言っているようですが、あれはきたならしいやつですから、相手になさらぬように、(笑声) それなのに、その嫌らしい、(直哉の曰く、僕にはどうもいい点が見つからないね)その四十歳の作家が、誇張でなしに、血を吐きながらでも、本流の小説を書くこうと努め、その努力が却かえつてみなに嫌われ、三人の虚弱の幼児をかかえ、夫婦は心から笑い合つたことがなく、障子の骨も、襖ふすまのシンも、破れ果てている五十円の貸家に住み、戦災を二度も受けたおかげで、もともといい着物も着たい男が、短か過ぎるズボンに下駄ばきの姿で、子供の世話で一杯の女房の代りに、おかずの買物に出るのである。そうして、この志賀直哉などに抗議したおかげで、自分のこれまで附き合つていた先輩友人たちと、全部気まずくなつているのである。それでも、私は言わなければならぬ。狸たぬきか狐きつねのにせものが、私の労作に対して「閉口」したなどと言つていい気持になつておさまっているからだ。

◇《彼は所謂よい家庭人であり》……《家庭のエゴイズム》《家庭の安楽》

(一)、《家庭円満》(二)、《安楽な家庭生活》《家族の保全》(三)と繰り返し出ていた《家庭の幸福》系の論点が、この(四)でも再び持ち出

される。

◇《直哉の曰く、僕にはどうもいい点が見つからないね》……前掲「座談会 作家の態度(二)」における志賀の《どうも評判のいい人の悪口をいふ事になつて困るんだけど、僕にはどうもいい点が見付からないね》の発言を指す。

◇《この志賀直哉などに抗議したおかげで、自分のこれまで附き合つていた先輩友人たちと、全部気まずくなつていのである。》……太宰が「如是我聞」ほかの構想メモを書き込んでいた『昭和二三年度文庫手帖』に、次のような文言がある。

井伏鱒二 ヤメロ といふ、足をひつぽると〔□〕いふ、「家庭の幸福」ひとのうしろで、どさくさまぎれにポイ〔□〕ントをかせいでゐる、卑怯、なぜ、やめるといふのか、「愛？」私はそいつにだまされて来たのだ、人間は人間を「だませ」愛する事は出来ぬ、利用するだけ、思へば、井伏さんといふ人は、人におんぶされてばかり生きて来た、孤独のやうでゐて、このひとほど、「仲間」があるないと生〔□〕きてをれないひとはない、井伏の悪口を言ふひとは無い、バケモノだ、阿呆みたいな顔をして、作品をごまかし(手を抜いて) 誰にも憎まれず、人の陰口はついても、めんと向かつては、何も〔□〕はず、わせだをのろひながらもわざ〔□〕だをほめ、愛校心、ケツペキもくそもありやしない最も、いやしい政治家である。ちやんとしろ。(すぐ人に向つてグチを言ふ。いやしいと思つたら、黙つて、つらい仕事をはじめよ、)私はお前を捨てて。お前たちは、強い。くだらぬものを(他のほめたり)どだい私の文学がわからぬ、わがままのみたに見えただけだろう、聖書は屁のやうなものだといふ、実生活の駈引きだけで生きてゐる。イヤシ〔□〕イ。私

は、お前たちに負けるかもしれぬ。しかし、私は、ひとりだ。「仲間」を作らない。お前は、「仲間」を作る。太宰は氣違ひになつたか、などといふ仲間を、ヤキモチ焼き、悪人、イヤな事を言ふやうだが、あなたは、私に、世話したやうにお〔□〕つしやつてゐるやうだ。ど、正確に話させう、かつて、私は、あなたに氣にいられるやうに行動したが、少しもうれしくなかつた。（青森県立図書館・青森県近代文学館（編）『資料集 第二輯 太宰治・晩年の執筆メモ』青森県文学協会、二〇〇一、四八頁、安藤宏翻刻による。）〔〕内は抹消された表現、□は判読不能の文字、傍線部は後から書き込まれた表現。）

冒頭の《井伏鱒二 ヤメロ といふ》の一文から、「如是我聞」の執筆中止を井伏が勧めたことが推測され、《自分のこれまで付き合つていた先輩友人たちと、全部氣まらずくなつてゐる》という記述と対応する。構想メモの記述から、もし「如是我聞」がさらに書き継がれていたとしたら井伏も批判の対象になつた可能性が窺えよう。

いったい志賀直哉というひとの作品は、厳しいとか、何とか言われているようだが、それは嘘で、アマイ家庭生活、主人公の柄でもなく甘つたれた我儘、要するに、その容易で、楽しそうな生活が魅力になつてゐるらしい。成金に過ぎないようだけれども、とにかく、お金があつて、東京に生れて、東京に育ち、（東京に生れて、東京に育つたといふことの、そのプライドは、私たちからみると、まるでナンセンスで滑稽に見えるが、彼らが、田舎者といふ時には、どれだけ深い軽蔑感が含まれているか、おそらくそれは読者諸君の想像以上のものである。）道楽者、いや、少し不良じみて、骨組頑丈、

顔が大きく眉が太く、自身で裸になつて角力すもうをとり、その力の強さがまた自慢らしく、何でも勝ちやいいんだとうそぶき、「不快に思つた」の何のとオールマイティーの如く生意気な口をきいてゐると、田舎出の貧乏人は、とにかく一応は度胆をぬかれるであろう。彼がおならをするのと、田舎出の小者のおならをするのとは、全然意味がちがうらしいのである。「人による」と彼は、言つてゐる。頭の悪く、感受性の鈍く、ただ、おれが、おれが、で明け暮れして、そうして一番になりたいだけで、（しかも、それは、ひさしを借りて母屋をとる式の卑劣な方法でもつて）どだい、目的のためには手段を問わないのは、彼ら腕力家の特徴ではあるが、カンシヤクみたいなものを起して、おしつこの出たいのを我慢し、中腰になつて、彼は、くしゃくしゃと原稿を書き飛ばし、そうして、身辺のものに清書させる。それが、彼の文章のスタイルに歴然と現われている。残忍な作家である。何度でも繰返して言いたい。彼は、古くさく、乱暴な作家である。古くさい文学観をもつて、彼は、一寸も身動きしようとしな。頑固。彼は、それを美德だと思つてゐるらしい。それは、狡猾こつぱつである。あわよくば、と思つてゐるに過ぎない。いろいろ打算もあることだろう。それだから、嫌になるのだ。倒さなければならぬと思ふのだ。頑固とかいう親爺おやじが、ひとりゐると、その家族たちは、みな不幸の溜息ためいきをもらしてゐるものだ。氣取りを止めよ。私のことを「いやなポーズがあつて、どうもいい点が見つからないね」とか言つていたが、それは、おまえの、もはや石膏せつこうのギブスみたいに固定してゐる馬鹿なポーズのせいなのだ。

◇《アマイ家庭生活》……「万曆赤絵」（『中央公論』一九三三・九）を

例に挙げてみよう。先にあらずしを紹介したように、万曆赤絵を手に入
れようと見に行く度に、代わりに犬を手に入れて来るといふ微笑ましい
日常生活が描かれた短篇である。妻は、私が万曆赤絵を欲しがることに
不満のようで、最初に代わりに犬を買って帰った時は《可笑しいより、
嬉しいわ》（『志賀直哉全集 第六巻』岩波書店、一九九九、一三〇頁）
と呟いたが、再び万曆赤絵が犬となった時は《万曆もい加減にして
頂かないと、これぢやあ犬ばかりふえて堪らないわ》（二三四頁）と話
す。こうした夫の振る舞いとそれに対する妻ののんきなコメントに、《ア
マイ家庭生活》の一端が窺えよう。

◇《道楽者、いや、少し不良じみて》……《道楽者》の語は、ここ以外
でも、《本質的な「不良性」或いは、「道楽者」を私はその人の作品に感
じるだけである。》（三）、《ヒステリックで無学な、そうして意味なく昂
ぶっている道楽者の言う口調》（四）と志賀について用いられていたが、
太宰の言う《道楽者》の《道楽》は、《（二）本職以外の道にふけり楽し
むこと。趣味として、ある事柄を楽しむこと。また、ものずきであるこ
と。その人。好事家（こうずか）。》（『日本国語大辞典』）の意味合いで、
本業として誠実に文学に取り組んでいないということか。

◇《不快に思った》の何のと……特に志賀「暗夜行路」には《不快》
《不愉快》という気分を表わす語が頻出しており、《不快》や類義語の《不
愉快》といった単語は作中で百回以上用いられている。《オールマイ
ティーの如く》との揶揄は、この使用頻度の高さに基いたものか。《時
任謙作の坂口に対する段々に積もつて行つた不快も坂口の今度の小説で
到頭結論に達したと思ふと、彼は腹立たしい中にも清々しい気持になつ
た。》（『志賀直哉全集 第四巻』岩波書店、一九九九、一八頁）、《変に淋
しい不快な気持になつた。》（二三九頁）、《謙作は何となく不愉快だつ

た。》（四三八頁）など、前篇・後篇にわたり、さまざまな場面で用いら
れている。

◇《私のことを「いやなポーズがあつて、どうもいい点が見つからない
ね」とか言っていたが》……「如是我聞」（一）の注釈（前号三二頁）
で触れた座談会「志賀直哉広津和郎両氏と現代文学を語る」（『文学行動』
一九四八・一、一二頁）における志賀の《年の若い人には好いだろうが僕
は嫌いだ、とほけて居るね、あのポーズが好きになれない。》、前掲「座
談会 作家の態度（一）」の《僕にはどうもいい点が見付からないね。》
といった発言を踏まえていよう。

も少し弱くなれ。文学者ならば弱くなれ。柔軟になれ。おまえの
流儀以外のものを、いや、その苦しさを解るよう努力せよ。どう
しても、解らぬならば、だまっている。むやみに座談会なんかに出
て、恥をさらすな。無学のくせに、カンだの何だの頼りにもクソに
もならないものだけに、すがって、十年一日の如く、ひとの蔭口を
きいて、笑って、いい気になつていようなやつらは、私のほうで
も「閉口」である。勝つために、実に卑劣な手段を用いる。そうし
て、俗世に於て、「あれはいいひとだ、潔癖な立派なひとである」
などと言われることに成功している。殆んど、悪人である。

君たちの得たものは、（所謂文壇生活何年か知らぬが）、世間的信
頼だけである。志賀直哉を愛読しています、と言えばそれは、おと
なしく、よい趣味人の証拠ということになつていられるらしいが、恥し
くないか。その作家の生前に於て、「良風俗」とマッチする作家とは、
どんな種類の作家か知つていよう。

君は、代議士にでも出ればよかつた。その厚顔、自己肯定、代議

士などにうつつけである。君は、あの「シンガポール陥落」の駄文（あの駄文をさえ頬かむりして、ごまかそうとしているらしいのだから、おそるべき良心家である。）その中で、木に竹を継いだように、頗る唐突に、「謙讓」なんていう言葉を用いていたが、それこそ君に一番欠けている徳である。君の恰好の悪い頭に充滿しているものは、ただ、思い上りだけだ。この「文藝」という座談会の記事を一読するに、君は若いものたちの前で甚だいい気になり、やに下り、また若いものたちも、妙なことばかり言って媚びているが、しかし私は若いものの悪口は言わぬつもりだ。私に何か言われるということとは、そのひとたちの必死の行路を無益に困惑させるだけのことだという事を知っているからだ。

◇《「謙讓」なんていう言葉》……「シンガポール陥落」への三度目の言及。次のように同文第三、第四段落で《謙讓》という言葉が複数回用いられている。

日本軍が精神的に、又技術的に^{えげぜん}斬然勝れてゐる事は、開戦以来、日本人自身すら驚いてゐるが、日々応接にいとまなき戦果のうちには天祐によるものも数ある事を知ると、吾々は謙讓な気持にならな^いではゐられない。天吾れと共に在り、といふ信念は吾々を一層謙讓にする。

一億一心は期せずして実現した。今の日本には親英米などいふ思想はあり得ない。吾々は互に謙讓な気持を持ち続け、国内よく和して、光輝ある戦果を少しでも穢すやうな事があつてはならない。天に見はなされた不遜なる米英がよき見せしめである。

◇《も少し弱くなれ。文学者ならば弱くなれ。》……この〈弱さ〉の称

揚と呼応するかのように、石川淳が追悼文で次のように太宰の芸術家としての〈弱さ〉を強調し、評価している。

「如是我聞」と題するものがある。ここでは「楽しい雰囲気を創る事に努力する」ことなどはみごとに抛棄されて、もはや「おいしい奉仕」のたくひではない。これはただ悪生活はかくのごとしといふことの、例証をもつてする弾劾である。たつたこれだけのことを書くのに、太宰君は「必死」であつた。死を決しなくてはたつたこれだけのことすら書けないといふところに、太宰君の清潔なる弱さがあつた。これは芸術家ではなくては断じてもつことを許されない弱さである。けだし、この弱さは地上に於ける善の性格にほかならない。（『太宰治昇天』『新潮』一九四八・七、五一頁）

「こっちは太宰の年上だからね」という君の言葉は、年上だから悪口を言う権利があるというような意味に聞きとれるけれども、私の場合、それは逆で、「こっちが年上だからね」若いひとの悪口は遠慮したいのである。なおまた、その座談会の記事の中に、「どうも、評判のいいひとの悪口を言うことになって困るんだけど」という箇所があつて、何という醜く卑しいひとだろうと思つた。このひとは、案外、「評判」というものに敏感なのではあるまいか。それならば、こうでも言つたほうがいいだろう。「この頃評判がいいそうだから、苦言を呈して、みたいんだけど」少くともこのほうに愛情がある。彼の言葉は、ただ、ひねこびた虚勢だけで、何の愛情もない。見たまえ、自分で自分の「邦子」やら「児を盗む話」やらを、少しも照れずに自慢し、その長所、美点を講釈している。そのもうろくぶりには、嘖き出すほかはない。作家も、こうなつては、もうダメであ

る。

「こしらえ物」「こしらえ物」とさかんに言っているようだが、それこそ二十年一日の如く、カビの生えている文学論である。こしらえ物のほうが、日常生活の日記みたいな小説よりも、どれくらい骨が折れるものか、そうしてその割に所謂批評家たちの気にいられぬということは、君も「クローディアスの日記」などで思い知っている筈だ。そうして、骨おしみの横着もので、つまり、自身の日常生活に自惚れているやつだけが、例の日記みたいなものを書くのである。それでは読者にすまぬと、所謂、虚構を案出する、そこにこそ作家の真の苦しみというものがあるのではなからうか。所詮、君たちは、なまけもので、そうして狡猾にごまかしているだけなのである。だから、生命がけでものを書く作家の悪口を言い、それこそ、首くくりの足を引くようなことをやらかすのである。いつでもそうであるが、私を無意味に苦しめているのは、君たちだけなのである。

◇この部分では、前掲「座談会 作家の態度（二）」における志賀の発言を拾いながら批判が重ねられてゆく。

◇《「こしらえ物」「こしらえ物」とさかんに言っているようだが》……「座談会 作家の態度（二）」中、太宰についてひとしきり発言した部分の直後、「こしらへ物と私小説」と小見出しが付けられ志賀が《拵へもの》論を開陳する部分が続くが、太宰はそこを踏まえていよう。

志賀 やつぱり齢でさういふ事は変つてゆくな。齢ばかりでもないかも知れないが。

中村 拵へものみたいなものが厭になつて行かれたんですか。

志賀 拵へものといつて、僕は、まあ、どうでなくちやならんとい

ふことは云はない事にしてゐる。拵へものでもよければいいのだが、下手な拵へものは嫌ひだね……。〔略〕僕のは私小説といふことに決められてるけど、自分が私小説でなくちやならんと言つたこともないし、思つてもゐないんだよ。（五五頁）

◇《「クローディアスの日記」……『白樺』（一九二二・九）に発表。志賀自身が「創作余談」（『改造』一九二八・七）で執筆に苦心したことを明かしている。

「クローディアスの日記」苦勞して書いた。これを書く動機は文藝協会の「ハムレット」を見、土肥春曙のハムレットが如何にも軽薄なのに反感を持ち、却つて東儀鉄笛のクローディアスに好意を持つたのが一つ、もう一つは「ハムレット」の劇では幽霊の言葉以外クローディアスが兄王を殺したといふ証拠は客観的に一つも存在してない事を発見したのが、書く動機となつた。クローディアスをいふ「ハムレット」中の人物をとつて来た以上、「ハムレット」に書かれた事と矛盾したくないと思つたので辻褄を合すのに却々骨が折れた。（『志賀直哉全集第六卷』岩波書店、一九九九、二〇三、二〇四頁）

君について、うんざりしていることは、もう一つある。それは芥川の苦悩がまるで解っていないことである。

日蔭者の苦悶^{くもん}。

弱さ。

聖書。

生活の恐怖。

敗者の祈り。

◇《日蔭者の苦悶》……芥川龍之介（一八九二・三・一）一九二七・七・二四）は実母の癡狂を期に母の実家である芥川家に預けられた。彼を巡っては芥川家と生家との間で諍いがあり、後に裁判を経て正式に芥川家の養子となった。「点鬼簿」（『改造』一九二六・九）などに小説化された以上のような複雑な家庭関係や、晩年の「歯車」（『文藝春秋』一九二七・一〇）でも言及された自身に流れる狂人の血に対する芥川の不安が、『日蔭者』という言葉を用いる太宰の念頭にあったか。なお、「如是我聞」の草稿では《滅び》と書いたのが消され《日蔭者》と改められている（日本近代文学館所蔵太宰治自筆資料集、J-DAC、写真・翻刻『太宰治全集13』二五一頁）。

「如是我聞」と同時期に執筆された「人間失格」（『展望』一九四八・六～八）でも《日蔭者》の語が四回用いられている。初めの三つは「第二の手記」中、大庭葉蔵が画塾の生徒であった堀木正雄の紹介で《共產主義の秘密会合》に参加した場面の直後に登場する。《非合法》に心地よさを感じる葉蔵は、『日蔭者』と《犯人意識》という二つの言葉を並べ自らに刻まれた生まれながらの《傷》を語り、それこそが心地よさの理由であると位置づける。四つ目は「第三の手記二」において、内縁の妻が強姦された後、薬物中毒に陥った葉蔵が葉蔵の奥さんにモルヒネの注射を渡してくれるよう頼む場面に登場する。警察がうるさく薬を渡せないと述べる奥さんの言葉に、自らにつきまとう《濁って暗く、うさん臭い日蔭者の気配》を感じる。なお、四つ目は、草稿において《日蔭者の》とあとで加筆されている（日本近代文学館所蔵太宰治自筆資料集、写真・翻刻『太宰治全集13』一八四頁）。

◇《弱さ》……「如是我聞」全体を貫くテーマの一つだが、芥川のこととしては、自身の敗北を記した「或る旧友へ送る手記」（『東京日日新

聞』『東京朝日新聞』一九二七・七・二五ほか）や「或阿呆の一生」（『改造』一九二七・二〇）、人間社会を河童の世界に戯画化しながら社会の中で苦しみもがく自らの姿を描いた「河童」（『改造』一九二七・三）は、晩年の芥川が自らの《弱さ》と向き合った所産と言え、太宰はそこに着目したか。

◇《聖書》……創作の素材としての「聖書」・キリスト教への芥川の関心は、「煙草と悪魔」「奉教人の死」「黒衣聖母」ほか（切支丹もの）と呼ばれる諸作に明らかだが、「西方の人」（『改造』一九二七・八）「続西方の人」（『改造』一九二七・九）に見られるキリストの一生に自らの人生を重ねる芥川晩年の思索にも太宰の関心は向けられていたかもしれない。

◇《生活の恐怖》……晩年の芥川は、体調不良に加え、人妻・秀しげ子との関係に悩まされ、また、放火・保険金詐取の嫌疑で義兄が鉄道自殺し、その事後処理に東奔西走を余儀なくされていた。こうした健康問題、女性関係、親族関係といった文学以外の生活面での無制限の煩わしさを指して太宰は《生活の恐怖》と括ったか。

◇《敗者の祈り》……芥川の遺稿である「或阿呆の一生」の最後の項「五十敗北」には《彼はペンを執る手も震へ出した。のみならず涎さへ流れ出した。彼の頭は〇・八のヴェロナルを用ひて覚めた後の外は一度もはつきりしたことはなかった。しかもはつきりしてゐるのはやつと半時間か一時間だった。彼は唯薄暗い中にその日暮らしの生活をしてゐた。言はば刃のこぼれてしまった、細い剣を杖にしながら。》（『改造』一九二七・二〇、創作欄二六頁）とあったし、例えば、宮本顕治が「敗北」の文学―芥川龍之介氏の文学について」（『改造』一九二九・八）で、小ブルジョア・インテリゲンチヤとしての自身が滅びた先に待つ新たな

文学を予感する芥川の姿を描き出したように、自らの敗北を意識しながらも必死に足掻こうとした芥川に、太宰は《弱さ》を抱えた人間の末期の《祈り》を見たか。

君たちには何も解らず、その解らぬ自分を、自慢にさえしているようだ。そんな芸術家があるだろうか。知っているものは世知知だけで、思想もなにもチンパンカンパン。開いた口がふさがらぬとはこのことである。ただ、ひとの物腰だけで、ひとを判断しようとしている。下品とはそのことである。君の文学には、どだい、何の伝統もない。チェホフ？ 冗談はやめてくれ。何にも読んでやしないじゃないか。本を読まないということは、そのひとが孤独でないと証拠である。隠者の装いをしながら、周囲がつねに賑やかでなかったならば、さいわいである。その文学は、伝統を打ち破ったとも思われず、つまり、子供の読物を、いい年をして大えぼり書いて、調子に乗って来たひとのようにさえ思われる。しかし、アンデルセンの「あひるの子」ほどの「天才の作品」も、一つもないようだ。そうして、ただ、えばるのである。腕力の強いガキ大将、お山の大将、乃木大将。

◇《チェホフ》……ロシアの小説家・劇作家アントン・チェーホフ（一八六〇～一九〇四）の名前を引き合いに出したのは、チェーホフも志賀も短篇小説作家と目されているところからだろうか。志賀は三学書房版『チェーホフ著作集』内容見本（一九四三）に推薦文を書いている。

◇《アンデルセン》……ハンス・クリスチャン・アンデルセン（一八〇五～一八七五）の特に童話作品のタイトルを引き合いに出し、志賀の作品

が大人の鑑賞に堪えない《子供の読物》程度のものだと批判しているわけだが、志賀は戦後、文芸雑誌『文學の世界』創刊号（一九四八・五）の巻頭に「書き始めた頃―稲村雑談」を寄稿、《実際の処女作》「菜の花と小娘」（『金の船』一九二〇・二）は《明らかにアンデルセンの影響を受けたものだつた》（二頁）と述べている。同じ内容は既に「続創作余談」（『改造』一九三八・六）でも述べられていた。

◇《隠者の装い》をしながら、周囲がつねに賑やかでなかったならば、さいわいである。……（二）のはじめに引用されていた「マタイ伝福音書」第二章の《饗宴の上席、会堂の上座、市場にての敬礼、また人にラビと呼ばれることを好む》あたりと響き合っているか。

◇《乃木大将》……《えばる》志賀を嘲して《腕力の強いガキ大将》《お山の大将》と呼び変えてゆく中、言葉遊び風に《乃木大将》が出て来る。かつて学習院長として、志賀ら生徒の文学活動を快く思わず、『白樺』発行に批判的だった乃木希典（一八四九～一九二二）について、《或る日自分の所へ報知新聞の「キリン児と不肖児」を書いてゐる男が来て「略」学習院では白樺は評判が悪いですよ。乃木さんなんか困つてゐられるやうですが……」かういつて、ならばヨス方がいゝといふやうな事をいつた。「乃木さんなんか眼中にあるもんか」といつたら変な顔をしてゐた。》（『編輯室にて』『白樺』一九二二・一五九頁）と意気盛んだった志賀がいつの間にか文壇の《大将》として君臨していることへの揶揄も含むか。

貴族がどうのこうのと言っていたが、（貴族というのと、いやにみなイキリ立つのが不可解）或る新聞の座談会で、宮さまが、「斜陽を愛読している、身につまされるから」とおっしゃっていた。それ

で、いいじゃないか。おまえたち成金の奴の知るところでない。ヤキモチ。いいとしをして、恥かしいね。太宰などお殺せなさいますの？ 売り言葉に買い言葉、いくらでも書くつもり。

◇《或る新聞の座談会で、宮さまが》……皇籍離脱した賀陽治憲（賀陽宮恒憲王の次男）による《太宰治の「斜陽」はちよつと身につまされておもしろいですネ》（『時事新報』一九四七・一〇・一四）という発言を踏まえていよう。

◇《太宰などお殺せなさいますの？》……先に批判した《お殺せ》という言葉遣いをあえて取り込むことで、挑発的な投げかけとなっている。

◇《いくらでも書くつもり》……続稿の意思があるかのような言葉で（四）は終わるが、執筆から一週間程で太宰は逝去し、「如是我聞」は絶筆となった。

◆以上、最終章である（四）では、志賀直哉を《老大家》《先輩》の代表として標的に定め、作品内容や座談会での発言を具体的に取り上げながら徹底的な反批判を行なっている。

文学者の《弱さ》という「如是我聞」全体を貫くテーマは、最後に志賀の《強さ》とは対照的な芥川龍之介の名前を呼び寄せ、対抗的に芥川龍之介＝太宰治という一つの系譜が提示されるに至る。太宰は挑発的文言で継続を示唆しており、結果的に中絶となってしまうものの、提出した文学的問題を受け止め、受け継ぐよう読者に求めているかのようである。

「如是我聞」年表

太宰治についての発言				「如是我聞」		
	掲載誌 発行日	新聞広告掲載日	太宰の反応	各章執筆時期	掲載誌 発行日	新聞広告掲載日
渡辺一夫発言	文明 19470901	未詳	⇒如是我聞（二）			
中野好夫発言	群像 19470601	未詳	⇒如是我聞（二）			
志賀直哉発言①	文学行動 19480101	未詳	⇒如是我聞（一）			
				(一) 19480227	新潮 19480301	19480320 読売 19480322 朝日
				(二) 19480406	新潮 19480501	19480530 朝日 19480602 読売
志賀直哉発言②	社会 19480401	19480414 朝日 19480416 読売	⇒如是我聞（三）			
				(三) 19480512-14	新潮 19480601	19480630 読売 19480701 朝日
志賀直哉発言③	文藝 19480601	19480601 朝日 19480604 読売	⇒如是我聞（四）			
				(四) 19480605	新潮 19480701	19480723 読売 19480725 朝日

- 尾崎めぐみ（日本文学専攻博士課程後期二年）
片木晶子（日本文学科助手）
近藤史織（日本文学専攻博士課程前期二年）
関朱夏（日本文学専攻博士課程前期一年）
丸山麻結（日本文学専攻博士課程前期二年）
李娜娜（日本文学専攻学術研究員）
山口俊雄（本学教授）